
carvaly

新兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

c a r v a l y

【Nコード】

N 6 8 1 3 X

【作者名】

新兎

【あらすじ】

ドール人形とそれに関わる人たちの連作風短編です。ブログからのお引越し。

「これは……また派手にやったわね」

目の前に置かれたスクラップを見ながら呆れたように彼女が言う。

「別にいいじゃん。どっちみち壊すんだし」

肩から吊ったライフルを持って余しながら呟く。

「ウーノの持ってくるロボットの照合が、どうして私に回されるか分かる？」

「さあ？　なんでなのケイちゃん」

問うと、彼女——ケイは一呼吸置くと静かに続けた。

「こんな壊し方するヤツは頭がぶっ飛んでる。」

いつこっちに向かってライフルをぶっ放すか分からないってさ」

言われて、あたしは笑った。

「そのぶっ飛んだヤツがあんたたちの仕事の手伝いをしているんだけどね」

「ま、おかげでこっちは楽できるわ。ありがたいことで」

ケイちゃんはそう言ってニヤリと笑うと、スクラップの確認を始めた。

身の回りにロボットがいる生活が当たり前になってから彼女たち警察の仕事は1つ増えた。

新しい型が出る度に買い換えられ捨てられるロボット。

ロボットの処理場は存在していたがそれは大した意味をなさず、街の至るところで違法廃棄されたロボットが転がった。その中にはまだ自律的に動くことができるロボットも少なくはなかった。

そういった違法廃棄ロボットの管理担当は、本来ならば警察機構の役割だったが、ロボット以上に厄介な、人間という種族を相手にしている当の警察にそんなくないことをする余裕はなく、いつのまにか警察の代わりに違法廃棄されたロボットをスクラップにして届ける壊し屋という職業が生まれた。

それが今のあたしの仕事というやつだ。

「よし、確認とれたわよ。報酬はいつもの口座でいいのよね?」

「うん、よろしく」

いつも通りのやり取り。書類にサインをして本日の仕事終了。ケイちゃんにサイン済みの書類を渡す。

「ほい、お疲れ様——あ、そういえばウーノにちょっと頼みがあったんだけど」

「頼み? ケイちゃんがあたしに?」

「ロボットの搜索なんだけどね。どうする?」

壊し屋の副業としてロボットの搜索を頼まれることはよくあることで、あたしは大抵断ったことがない。だから、どうして彼女が念を押すようにそういったのが少し引かなかった。

「搜索でしょ、やるよ」

「じゃあ、これ資料」

ケイちゃんはあたしから受け取った書類をしまうと、デスクからファイリングされた資料を取り出す。かなり分厚い。

資料を受け取る「仕事を引き受けること。あたしは、その分厚さにうんざりしながらそれを受け取った。

この街の区画を上・中・下の3つに分けるとすると、あたしの住んでいる場所は最悪なまでに中途半端な中ランクにあたる。それをさらに細かく3つに分類しても、また中ランクだから救いようがない。

かといって、あたしがこの場所を気にしていないかといえば決してそうではない。

この区画は人口が爆発的に増えたこの星でもっとも人口密度が低いらしい。

人間は中途半端なものを嫌うといったところだろうか。おかげでこの区画は単純に他人と接するのが苦手な人間が好んで住むようになった。

つまり、仕事以外で他人と関わりを持ちたくなく、中途半端に生を消費するあたしには、もっとも都合な場所だったのだ。

街中に張り巡らされた自動走路オートロードに乗って家路につく。その途中であたしは仕事用の銃弾を買い忘れていたことに気づいた。

一旦、自動走路オートロードから降り、ジャンクシティに向かう走路に乗り換える。

ジャンクシティには、鉄くずの集まりのような雑然とした建造物が立ち並んでいる。いつ来てもそこだけ別世界のような印象を与える場所だ。

あまり長居する気もなかったのであたしはさっさと銃器屋へ足を運び、目当ての物を買ひ揃え足早に走路乗り場に引き返した。

途中、ふと安っぽいライトに照らし出された中古の人形屋ドールショップの看板が目に残った。

ショーウィンドウには、主に捨てられたたくさんの人形たちドールが立ち並んでいる。

人形ドールとは、擬似恋愛用のためにつくられたロボットのことだ。こういう物を見るたびにつくづく人間の欲望とはすごいと思わされる。

最新型よりも少しだけ型の古い人形たちドールが、あたしの視線を感知したのか、一斉に顔をこちらに向け、まるで街娼がするような媚びた笑顔をつくった。

基礎プログラム通りの行動だが、それはまるで誰かに買ってもらわねば自分たちはスクラップにされることを知っているかのように見えた。

普段なら湧き上がる嫌悪感からそのまま素通りをするはずなのに、なぜかあたしの足はその場でびたりと止まった。

たくさんの笑顔の中に1つだけ妙に不自然な笑顔があることに気づいたからだ。

その笑顔を浮かべた人形ドールの型はあまり巷で見かけたことのないタイプのものであった。

もつとも、あたしはそれほど人形ドールの世界に詳しくないけれど。

10代の少女のボディ、スラリとしている割に、頬には弾力が感じられ、その製作にはかなりの金がかかっていることが窺えた。

なにがどう不自然なのかあたしはまじまじと、その人形ドールを見やるそして、分かった。その人形ドールが浮かべている笑顔は人間が浮かべるものとしてあまりに自然で、それゆえに人形ドールが浮かべるものとして不自然極まりなかったのだ。

ショーウィンドウの前で一人難しい顔をしていると、変わらず笑

顔を続ける人形^{ドール}たちの中で、その人形^{ドール}だけがあたしに向かつて、まるで昔のアイドルみたいにひらひらと手を振ってきた。挑発するかのようなその行為になぜか無性にムカつきを覚える。

それで——つけなくてもいい踏ん切りがついたというか、あたしは衝動に身を任せて、一生開けることはないだろうと思っていた人形^{ドール}の扉^{ルシヨップ}を開け、その人形^{ドール}を即金で買っていた。

まったく自分で自分が信じられない。

業者に頼めば運搬してくれたらしいけれど、見知らぬ他人に自分の住所を教えたくはない——

そんなつまらない意地を張ったことを後悔しながら、人形^{ドール}の入ったボックスを手に行くこと数十分。後悔が最高潮に達した頃にあたしはようやく部屋にたどり着いた。

部屋の適当な場所にボックスを置くと、これでもかというほどわかりやすい位置にある開閉ボタンを押す。

わずかな駆動音。ボックスがゆっくり開く。

ボックスの中で眠りにつく人形^{ドール}の姿はショーウィンドウに飾られていた時と何ら変わりのない姿だ。

ボックスが完全に開くと同時に起動キーが入るようになっていたのか、眠っていた人形^{ドール}が静かに目覚める。

そして、あたしと視線が合うと、ショーウィンドウで見た笑顔そのままに、その人形^{ドール}は微笑を浮かべた。

「起動ナンバーの登録をお願いします」

「ドールのフリはなくていいよ」
「起動ナンバーの登録をお願いします」

人形^{ドール}は無表情であたしの言葉を無視すると、もう一度そう繰り返した。

面倒くさい。あたしは、腰に挟んでいたハンドガンを構えるとドールの額に狙いを定めた。

「見て分かんと思うけど、一瞬で頭吹き飛ぶよ」

人形^{ドール}は慌てることなく向けられている銃口を凝視する。この時点で、普通の人形^{ドール}じゃないことが分かる。

「あちゃー、壊し屋さんでしたか。これはまた難儀な職業の人に買われちゃいましたね、私」

人形^{ドール}は本当にまいったなーと言うように頭に手をやった。

「あたしの職業よく分かったね」

「そんな大仰な銃を持つてる人間なんて、壊し屋さん以外に考えられませんからね」

確かにそうだ。こんなものを持ち歩く者といえば壊し屋しかない。
い。

「でも、普通のドールにそんな判別はできないはずだけど？」

「確かにそうかもしれませんがね」

「あんだ、いったい何者？」

「んー、そうですね。知識が豊富な天才ドールってことで納得していただけますか？」

笑顔を微妙に崩し——そうするとさらに人間くさくなる——ドールは言った。

「無理だね」

あたしは、銃口を向けたまま言う。人形^{ドール}が肩を竦める。

「それではどうしたら納得してくれますか？」

「あんたが何者かちゃんと話せば納得するかもよ」

あたしの言葉に人形^{ドール}は小さく嘆息した。

どこからどこまで人間に似せて作られているんだか。呆れてしま
う。

「そうですねえ、簡単にいうと私は違法廃棄ロボットですかね」

日常では滅多に聞くことのない、あたしら壊し屋にとっては聞き
慣れた単語を人形^{ドール}はさらっと口にした。

「実は私、ある目的で造られたんですけど、ある事件が起きてしま
いまして、そのまま廃棄処分になるところを自力で脱走したんです。
その後はまさに波乱万丈でしたよ。まあ、なんだかんだめげずに色
々な困難を乗り越えてきた結果、今は生命の危機に立たされていま
すね」

「ある目的とかある事件ってのはなに？」

「それは、言えません」

「……じゃあ、あのショップでドールになりすましてたワケは？」

あたしは他の質問をぶつけてみる。

「なにはなくとも住人IDがなくては身動きが取りにくいですからね。買われた先のマスターを殺して住人IDを奪おうかと考えていました」

あっさりと言う。つまり、あたしを殺そうと考えてたわけか。

あっけらかんとした態度にムツとしたが、それで分かったこともある。

【人間には逆らわない、殺さない、傷つけない】

マスター

【主人の意思には逆らわない】

【自ら消滅しない】

ロボットがロボットたる3原則。けれど、このドールにはそのプログラムが組み込まれていない。つまり、その気になれば、こいつは人間を殺すことが出来るってわけだ。

一体、どんな目的で作られたのか気になったが、どうせ口を割らないだろう。

「そろそろ撃つていい？」

「ダメですよー。大体、私を壊してもスクラップリストには登録されてないんですから、あなたにはなんのメリットもありませんよ」

「あんたに殺されなくなるってのがあたしのメリットだと思うけど」

「そのことならご安心ください」

言っと、人形はいやに親しげな笑顔を造った。

ドール

「あなたを殺すのはやめました」

「はあ!？」

「だって、この状態から攻撃しても、私のほうが完璧に分が悪いですし、それにあなたみたいなクレイジーな人間に興味が出てきました。このままあなたの所有物になってしばらく様子を見ることにします」

突然の申し出にこちらが状況を理解する間も置かず、人形^{ドール}はあたしの手を友好の証とでもいうように握った。

そして、思い出したように「そうそう、私にはパルシアルという立派な名前がありますのであんたというのはやめてくださいね」と言った。

あたしの毎日は単調な繰り返しだった。朝、目を覚ますとスクラップリストをチェックしに壊し屋ギルドに向かい、昼は適当に食事を取り、夕方になるとリストの中から選んだ違法廃棄ロボットを探しに行く。

壊し屋の報酬は、普通の職業よりも高い。だから、そう毎日仕事をする必要も本当はなかったのだけれど、あたしは毎日変わらず仕事をしていた。

仕事をして帰ってくる頃には、ぐったりしてなにも考えずに眠ることができたからだ。

あたしは今まで、できるだけ意識してなにも考えないように過ごしていた。

そして、これからもずっとそうしていくつもりだった。

なのに、パルシアルの存在は、あたしが今まで築き上げてきた、そんなささやかな日常性を揺らがせはじめていた。

「ウーノさんに質問です」

「……なに？」

「このロボットはどうして人を殺すのでしょうか？」

パルシアルは、あたしの前に置かれた資料を手にとって言う。この間、ケイちゃんにもらったものだ。

資料を読んだ時、あたしはその予想外の内容に愕然とした。彼女からは、単にロボットの搜索としか聞いていなかったからだ。

それは完璧にあたしの思い込みだったようで、搜索は搜索でもそのロボットの前には「殺人」という物騒なおまけがついていた。

殺人口ロボットの搜索なんて聞いていたら、あたしは絶対に資料を

受け取らなかつただろう。

ケイちゃんにというよりも、いつもの簡単な仕事だと勝手に思い込んでいた自身の馬鹿さ加減にムカついた。

しかし、引き受けてしまった以上はどうしようもないので、あたしは、渋々、その殺人口ボットの情報集めに乗り出したわけだ。

「ロボットの事なんてわかるかよ。単にそういうプログラミングされてるだけでしょ。っつーか、お前だって人殺せるくせに」

殺人口ボットを製作したAmokという研究所はもう潰れてしまい、上手いこと情報が集まらなくなっている。

時間だけが無駄に過ぎていく、その苛立ちもあって、ついきつい言葉で返してしまったあたしを、パルシアルがしょんぼりとした目で見つめていた。

言い過ぎたことに気づく。こいつに八つ当たりするなんて最悪だ。

「パル……」

「ウーノさん」

「は？」

咄嗟に謝ろうとしたあたしより先に、パルシアルが口を開く。

「お前というのはやめてくださいね。私にはパルシアルという立派な名前があるんですから」

「そっちかよ」

「はい？ なにがですか？」

「なんでもない。つか、長すぎなんだよ、お前の名前」

「でも、これ以上ないくらいいい名前でしょ？」

「パルでいいだろ、パルで」

「……ずるはダメです」

パルシアルはきっぱりと言う。

あたしは深く嘆息した。こいつと話していると疲れる。

「ウーノさん」

「なんだよ？」

「もう1つ質問なんですけど、人が人を殺すのはなぜでしょう？」
「は？」

あたしがパルシアルを見ると、パルシアルはにっこりとした笑顔を口元に浮かべていた。胡散臭い笑顔だ。

「ロボットが人を殺すのはプログラムなんですよね。では、人が人を殺すのはどうしてでしょう？」

なおも質問を繰り返すパルシアル。

なにも知らないはずなのに嫌なところをついてくる。あたしはパルシアルから目を逸らす。

「……人間には感情があるからじゃないの」

「まったく無関係の人間を殺すときもそうなんですかねえ」

パルシアルはあたしの心中を知ってか知らずかそう付け加えた。
これ以上、話をしたくなくて、あたしは乱暴に立ち上がる。

「どこに行くんですか？」

「警察署」

投げやり気味に返して玄関に向かうと、背後で小さな嘆息が聞こ

えた。

人が傍にいてもいなくても人と同じような行為をする。パルシアルには、あたしが及びもつかないような技術が搭載されているようだ。

本当に一体なんの目的で作られたことやら――

改めて彼女の胡散臭さを確認しながら、あたしは外に出た。

「あら、やっと来たわね」

あたしの姿を認めると、ケイちゃんは待っていたとでもいうように言った。

「どういう意味？」

「搜索の件、断りにきたんじゃないの」

意外そうにケイちゃんは言う。騙すような形で仕事を引き受けさせて少しは悪いと思っていたらしい。

「まさか。ちゃんと探してるよ。ただもうちょっと情報がないか聞きに来ただけ」

「へえー。っていうか、なんでライフル持ってるの？」

「え？ ああ、出かける時の単なる癖」

「危ないヤツね」

ケイちゃんは、そういつて肩を揺らすと「少し待ってて」と席を立った。

しばらくして戻ってきた彼女の手にはA4サイズの茶色い紙封筒。

「最新情報」

ケイちゃんは、スツとそれを差し出す。

しかし、封筒の隅に微かに残っていた日付は、あたしがケイちゃんから依頼を受ける数日前になっている。どうやら情報を出し惜しみしてたらしい。

「最初からくればいいのに」

受け取りながらケイちゃんを軽く睨む。

ケイちゃんは困ったように「引き受けるかどうか分かんなかったからさ」と目を逸らした。

「少しは信用してよね」

まあ、警察にもいろいろと事情があるんだろうけど。あたしは苦笑しながら、封筒から資料をとりだして、一応の確認をする。

前回もらったものよりも詳細な情報。細かくは家に帰って見ればいい。あたしは、資料を封筒に戻し、バッグにしまう。

「ところでさー」

「ん？」

「あんた、壊し屋以外の仕事する気ない？」

「はあ？ なにいきなり」

突然、ワケの分からないことを言いだしたケイちゃんに、思わず胡散臭げな視線を投げる。

「いや、今度さ、新部署が設立するんだけど、ちょっといろいろあつて、銃器の扱いに長けてる人をスカウトしておいてくれって上から頼まれたのよ」

「へえ、どんな仕事？」

「簡単に言つとSPみたいなもんかしら。ウーノなら銃器の扱いも慣れてるし、適任かなと思って。まあ、毎回、命張ってる壊し屋よりは多少収入は落ちるかもしれないけど、少なくとも安全だし安定してるし、悪い話じゃないわよ」

安全、安定か。あたしはそんなもの望んじやいない。

「悪いけどいいよ」

「やっぱり」

ケイちゃんは、あっさりとした声でいった。

「絶対、断わられるって思ってたのよね」

「なにそれ」

「なんかウーノってさ、死ぬために壊し屋やってるみたいなのがあるでしょ」

意識したわけではないが、ケイちゃんの言葉に目つきが悪くなるのが自覚できた。ライフルを無意識に握る。

「……どういう意味？」

「特別、お金に困ってるわけでもないのに、今回みたいな危ない仕事も引き受けるし、稼いだお金はほとんど使わないで死んだ妹さん

の口座に振り込んでるでしょ。ああ、これはまともに人生送るつもりないんだなって誰だって分かるわよ」

「……妹は死んだんじゃなくて行方不明なだけだよ」

「まあ、どっちでもいいけど。ウーノの人生設計にケチつける気なんてさらさらないし」

あたしの言葉にケイちゃんは、同情とも憐れみとれるなんとも形容しがたい表情をうかべた。

家につくと丁度、玄関から配達業者と思われる服装の男が数人でてくるところだった。

どういうことだ？

あたしは不審に思いながら、部屋に入る。瞬間「なにこれ？」とぼかんと口を開けていた。家を出たときにはなかった大きなベッドが部屋の半分を占領していたのだ。

「あ、ウーノさんお帰りなさい」

隣の部屋にいたらしいパルシアルが、ひょっこりと顔を出す。

「なにこれ？」

あたしは、同じ疑問を繰り返した。パルシアルは大きな目をキラキラと輝かせて

「見ての通りベッドですよ。すごいでしょ」

「すごい？ あー、確かにすごいね。こんなおっきいベッドはじめてみたよ」

「でしょ。ふつかふつかの超高級ベッドなんですよ」

嫌味だったのに嬉しそうに頷くパルシアル。

「で、こんなもの誰が使うの？」

あたしが尋ねると、パルシアルは分かっているくせにというように笑い「もちろん、わたしですよ」と胸を張った。

「あんたにはボックスがあるでしょ」

「あれ、狭いし固いし、おちおち寝てられなかったんですよ」

「スリープモードに入れば、んなもん関係ないでしょうが」

言外にロボットの癖にという含みを持たせながら言うと、パルシアルはチツチツと指を横に振り「甘く見られては困りますね。私はスリープモードでもちゃんと体感機能が生きてるんですよ。これだから、情緒のない人は」と、やれやれと言う風に首を振った。

まったくこいつは人を苛つかせる天才だ。あたしは、内心を悟られないように、部屋の隅においやられているPCデスクに腰掛ける。

「情緒がなくてけっこう。っていうか、だいたいお前、そんな金どこに持ってたわけ？」

「ウーノさんの口座にありました」

「はあ！？ お前、あたしの金勝手に使ったのかよ！」

「はい。ちよっとウーノさんの口座を調べてみたら使いもしないお

金がたくさんあったものですから。使ってもらえないお金ほど可哀相なものはないですよ。いつなにかある時代か分かんないですから使える時にしっかり使っておかないと――」

悪びれた様子のないパルシアルに、頭が痛くなる錯覚を覚えてため息をつく。こいつと暮らしたしてからこんなことばかりだ。

「なんだかお疲れのようですね。お風呂で背中でも流してあげましょうか」

「キシヨイこと言うな、アホ」

「心外ですね。ドールには標準的に搭載されているプログラムらしいですよ、このキシヨイこと」

「……あんたはドールじゃないでしょ」

「まあ、そうですけど。ドールになりすます時に、一応の基本データはインストールしてあるんですよ。三原則は邪魔なんで省きましたけど」

「だから、お背中流しましょうか？ マスター」とパルシアルはお風呂場を指差してウインクをした。こんな仕草一つとっても人間らしすぎて本当にムカつく。

あたしは、肩に掛けっぱなしにしていたライフルを構える。

「マジで壊すよ」

「そ、それは勘弁して欲しいですね」

パルシアルは、両手を上げて困ったように微苦笑をつくる。まったく、大した機能だ。これ以上、話をしていても疲れるだけだ。あたしはパルシアルを相手にするのをやめると、ライフルを下におろしPCの電源を入れた。

さっきもらった情報をまとめていこう。

「それ、新しい情報ですか？」

いつのまにか隣に立っていたパルシアルが、もらってきたばかりの資料を素早く手に取る。

「邪魔すんなよ」

「いいじゃないですか。私も協力しますよ」

「お前のいう協力ってのは邪魔するってことでしょ」

「あー、またお前って言いましたね。何度も言いますけど——」
「うっさいなー。それ、返せって」

あたしは、パルシアルの手から資料をもぎ取る。

「まだ見てないんですよー。横暴はんたーい」

ぶーぶーと文句を言うパルシアルを適当にあしらいながら、あたしは資料に目を通していく。

警察署でチラッと確認した時にも思ったが、予想以上に詳細な情報だ。これでどうして見つからないのかが分からない。

資料から読み取る限り、Amokが製作していたロボットは軍事用のものだったらしい。

しかし、なんらかのプログラム異常が発生し、ロボットはその場にいた研究所員を殺して脱走。なし崩し的にAmokはそのまま消滅。

資料をパラパラとめくっていくと脱走したロボットの設計図があった。

一見、ドールとしても通じそうな10代の少女型。見覚えのある型だ。いや、見覚えがあるどころか——

「なにか分かりましたか？」

パルシアルがあたしを覗き込むように言う。

あたしは資料を持ったまま、パルシアルの全身を眺めた。まったく同じタイプだ。

ある目的で造られたんですけど、ある事件が起きてそのまま廃棄処分されるところを――

パルシアルの言葉が蘇る。

ある目的が軍事目的。事件とはプログラムの異常。なぜ、パルシアルがこれほどまでに人間に似せてつくられたかは、敵に怪しまれないようにするため。

そうだとしたら、全て辻褄が合うじゃないか。しかし、それならばなぜ――

「どうかしたんですか、ウーノさん」

あたしの態度に違和感を感じたのか、パルシアルが不思議そうに訊いてくる。

「顔色が悪いようですけど？」

なぜ、こいつはあたしを殺さないんだろう？

あたしは、無防備なパルシアルを蹴り飛ばし、傍らに置いていたライフルを素早く構えた。そんなあたしをパルシアルは尻餅をついたまま目を丸くして見つめてくる。本当に人間そのものの所作だ。

銃口を向けられているパルシアルがゆっくり立ち上がる。

軍事用に作られたボディにどの程度の能力があるのか想像もつかない。緊張に体が硬くなる。

しかし、パルシアルは呆れるほど暢気な声で「……いったいなあ。そういう趣味があったんですか、ウーノさんは」とお尻をさすった。

油断させるための作戦だろうか。緊張を解くことなくパルシアルを睨みつける。

しかし、パルシアルの表情は一定したままだ。いつも通り人間臭い笑顔を浮かべている。

だが、その体はあたし同様に緊張しており、あたしからなにか仕掛けられたら、即座に対応できる状態にシフトしていることが見てわかった。

あたしは警戒態勢を崩さないように気をつけながら、パルシアルに資料を投げ渡す。バサリと音を立ててそれはパルシアルの足元に散らばった。

「それ、あんだでしょ」

足元の資料をパルシアルは無言で一瞥する。

「危つく騙されるところだったよ」

「……ウーノさん」

パルシアルが資料を踏みつけて、一歩足を踏み出す。

銃口は変わらず彼女の動力部を捉えているのにだ。そんなことはまったく意に介した風もなくパルシアルはあたしに近づいてくる。

「動くな！」

あたしは、牽制にパルシアルの足元めがけて発砲した。パルシアルの足が止まる。

「このロボットはどうして人を殺すんでしょう、だったつけ？ あなたの質問」

「あんたじゃなくて、パルシアルですよ」

「んなことはどうでもいいよ。で、その答えはなんだったの？ あんたが一番知ってるはずでしょ」

「プログラムだって、ウーノさんは言っただじゃないですか」

パルシアルが冷静に言う。

「あたしはあなたの口からホントの答えを聞きたいんだよ」

「じゃあ、ウーノさんにも質問に答えて欲しいですね」

いやに意味ありげに微笑むパルシアルに鼓動が少し早まる。

「なに？」

「私がしたもう1つの質問ですよ。人はなぜ人を殺すのでしょうか？」

「……それは、感情があるからだって、言っただろ」

一度、言った嘘臭い言葉をあたしは口にする。パルシアルはあたしの答えに満足したように笑った。

「なるほど、感情ですか。それは、無差別テロという行為だったとしても当てはまりますかね」

瞬間、あたしの心臓は跳ね上がった。

なぜこのタイミングでそんな単語が出てくる。なにを知っているだ、こいつは。全てを知っているというのだろうか。

あたしは、探るようにパルシアルを見る。

「失礼だと思っただんですけど、少し調べたんですよ、ウーノさんのこと」

あたしの不審の視線に気づいたのか、パルシアルが言う。

「な、なんで、そんなこと」

掠れた声で問うと、パルシアルは「ウーノさんに興味があったからです」と笑った。

「ウーノさん、2年前にテロで妹さんが行方不明になってますよね。遺体は発見されないまま公式に死亡通知が出されてました」

街の中央に建設されたセンチリービル。オフィス、レストラン、ファッション関係のショップ、などをそなえた複合ビルで、いつも多くの人間がそこにいた。

街の中枢を担っていたそれが、テログループによって爆破され、何万人もの犠牲者を出したのは有名な話だ。

「テロを企てたリーダー格の人物はその直後に何者かに殺害されていますね。実行犯は行方不明ですがリーダー同様殺害されたと見られています。テログループは誰がリーダーを殺したのか疑心暗鬼になり今はもうちりぢり——これじゃあ、憎しみにまかせて仇討ちもできませんね」

パルシアルの端的な話を聞いていると、それは本当にくだらない

ことだと実感できた。ずっとそうだとは思っていたけれど、これほどだとまでにくだらないうことだったのだ。

パルシアルは全てを見透かした目であたしを見ている。

「……なにが言いたいの？」

「つまりですね、爆破テロを実行する人間は、どういう理由でそうしようと思うのかが知りたいんですよ」

パルシアルが一歩足を踏み出した。先程のように牽制をする余裕は今のあたしにはない。

「そうそう、今回の amok 社製のロボットによる連続殺人なんですよ。あれは、実は無差別に行われているわけじゃないんですよ」

こちらの返事も待たずにパルシアルは勝手に話しはじめた。

「ロボットは正確ですからね、誰か1人を殺すために無関係の人間を殺すようなことはしません」

「……じゃあ、今まで殺された人間はどういう理由で殺されたんだよ？」

資料に載っていた被害者リストにはまったく関連性が見当たらなかった。話がそれたことで少しだけ落ち着きを取り戻してそう尋ねる。

「殺された人間は直接的にでも間接的にでも Amok と必ず関わっているんですよ。出資者だったり、企業だったり……殺人ロボットのプログラムは Amok のコンピュータに名前が載っている人間を殺すようになっています。つまり、プログラム通りというウーノさ

んの答えは正解だったわけです」

流暢に喋るパルシアルに呆気にとられながらも 「なに、他人事みたいに言ってるの」と毒づく。

しかし、パルシアルは「ウーノさんと違って他人事ですからね」とニツコリ笑った。

心臓を抉るようなその言葉にあたしは言葉に詰まる。

「言い忘れてましたけど、私はa m o k社の殺人口ロボットではないですよ」

「え？」

「言っただじゃないですか。ある目的で造られたんですけど、ある事件が起きて、そのまま廃棄処分されるところだったって。私は、ウーノさんが追っている殺人口ロボット、A Iって言ってますけどね、そいつのプロトタイプとして造られたんです。A Iが完成したら、一緒に仕事をするはずだったんですけど……ウーノさんもご存知の通り、A Iが研究所の人間を殺して脱走しちゃったもんですから、私は職を失って散々ですよ」

「……本当にあんたじゃないの？」

「ええ。私ではないですね。だから、いい加減にそれを下ろしてほしいんですけど」

パルシアルはあたしの手にあるライフルを指差す。

一瞬、迷ったもののパルシアルの体から警戒態勢が消えていることに気づいて、あたしは素直にそれをおろした。

パルシアルが満足げに笑む。

「で、さっきの質問に戻りますけど。人が人を殺す理由に感情とい

うものが存在するのは、なんとなくですが分かります。でも、無差別に人を殺す人はどういう理由でそうするんですか？」

「……さあ」

「分かりませんか？」

念をおすようにパルシアルが言う。

分からない。

なぜなんて、今さら聞かれても分かるはずがない。いや、あの頃、聞かれたって分からないだろう。

項垂れながら首を振る。

「そうですか」

パルシアルは幻滅したようなため息を吐くと部屋を出て行った。

めまぐるしく飛び交う嘘、情報、犯罪。

あの頃の私は、この手で何でもできると思っていた。できないことなんて、なに一つないと思い込んでいた。

だけど、それは単なる思い違いで、それに気づかなかったあたしはバカみたいにくだらないうちを犯した。

オートロード
人口走路からおりると、途端に人の群れと行き当たる。

立ち並ぶ高層ビル。人工的に造形された直線の世界の象徴。排気ガスと雑踏の中で生まれる熱気、無機的な香りのない空間が大都会を巻き込んでいる。

あの日以来、来たことのない街の中心部。あたしがいなくても、世界は動いている。

パルシアルがいなくなってから数日、あたしは久しぶりに外に出た。

目的なんてない。ただもう一度確認したかっただけだ。人が一人いなくなっても、世界は変わらず動くってことを。

目的のない数時間を過ごした後、あたしは思い立って警察署に行った。仕事を断るためだ。

信じてといった手前、なんの連絡もなしにロボットの搜索を打ち切ることは気が引けた。そこまで気が回るほどには、あたしの精神は落ち着いてきたんだろう。

大丈夫。あたしは、まだ大丈夫だ。

警察署の扉を開ける。瞬間、嫌な匂いがした。

硝煙と血の入り混じった独特の匂い。床には砕けたガラスが散らばっている。右奥の廊下から銃声。悲鳴。足音。そして、静寂。

異様な気配。何かが起こっている。確実になにかが起こっていた。

恐る恐る移動し、廊下の奥を窺う。視線の先には何体もの死体が転がっていた。

「っ！」

いったい、なにが起こったんだ？

あたしがここに入って来て銃声を聞いてから、まだものの数分もたっていない。危機感が聊か足りない警察とはいえ、これほどあっさりと殺されるものだろうか。

あたしは湧き上がってきた唾をゴクリと飲み込む。

この殺戮者は何者だ？

なるべく足音を立てないように気をつけながら、ゆっくり歩を進める。見知った空間がまるで始めてくる場所のように感じられた。

あたしはいつもライフルをかけている肩に手を伸ばし、今日は持ってきていなかったことを思い出した。手持ちの武器は腰に挟んだハンドガンだけだ。

爆発しそうな心臓を意識しながら、どうにか呼吸を落ち着かせようと努力する。

ケイちゃんは無事なんだろうか？ 不意に思い出した。

彼女のいる場所は、署内の地下だ。殺戮者が地上からやってきた

のならまだ生き残っている可能性もある。

どうする？ 逃げるか？

考えるより先にあたしはハンドガンを片手に走り出していた。

チカチカと点滅する照明。静かだ。死体もない。
壁にもたれかかるようにして様子を窺う。いつもケイちゃんが座っているはずのデスクは空いている。

なんだ、上手く逃げたのか——あたしがそう安堵の息を漏らした瞬間

「あれ？ ウーノ、そんなところでなにしてるの？」

反対側の通路から暢気な声がかげられた。

コーヒークップを持ったケイちゃんが、軽い足取りであたしに近寄ってくる。上でなにが起こっているのか、まったく気づいていないようだ。

あたしは呆れて彼女を見ていたが、ふとその背後になにかが忍び寄っていることに気づいた。

「ケイちゃん！！ 避けてっ！！！！！！！！」

ソレが明確な意志を持って動き出すと同時に、あたしは叫んでいた。

ケイちゃんが反応できるかどうか考えずに、ソレに向かって引

き金を引く。

銃声と悲鳴と着弾音。それら全てが重なる。

油断していたのか着弾の衝撃でソレは後ろに吹っ飛び、床に激突すると動きを止めた。

横に飛んで銃弾を避けたケイちゃんは、たった今何が起こったのかいまだ分からないでいるのだろう。呆然とあたしを見ている。

「なにしてんの！ 早くこっち来て！！」

あたしが怒鳴るように声をかけると、ようやくケイちゃんは我に返って立ち上がった。

「い、一体なんなのよ？ どういうこと？ なんなのあれは？」

「警察お待ちかねのロボットが到着したんだよ」

「え？」

軍用に作られていたロボットは、警察に届けられるはずだった。

もしかしたら、この間、ケイちゃんが新しくつくられると言っていた部署に配属される予定だったのかもしれない。だとすれば、Amokのコンピュータにこの署の人間の情報が載っていてもおかしくない。

そして、その情報を元に、いとも簡単に殺人を犯す軍事用のロボットがここにやってきた。

真偽はともかくそれがあたしの出した結論。

「ともかく、ケイちゃんは逃げてよ」

「ウーノ、あんたはどうするの？」

ケイちゃんの戸惑いに満ちた声と、ソレが立ち上がるのは同時だった。

さっきの被弾で左肩が少し削れているが、たいしたダメージにはなっていないようだ。ゆっくりとこちらに向かってくる。

「ウーノ……早く逃げないと」

ケイちゃんが震えた声であたしの肘を引っ張る。

きつと逃げてでも無駄だ。

人を殺すために作られたソレは相手に逃げられたからといって追跡を途中でやめるほど甘くないだろう。一度、狙いをつけたなら、例え地の果てまでだって追いかけてくる——あれはそういう類のものだ。

そして、たつたいまソレに攻撃を加えたあたしも攻撃対象に入ってしまったはずだ。ならば、戦うしかない。

「ケイちゃんだけ逃げて」

「でも」

ソレが攻撃態勢に入るのが分かった。

「ケイちゃんがいると邪魔なんだよ!!」

あたしはケイちゃんの手を振り払い、凄まじい速度でこちらに接近してくるソレに引き金を引く。ソレは、今度は吹き飛ばない。

銃声。銃声。銃声。

すぐ間近までソレが来る。

ヤバイ！——そう思った瞬間、世界が回転した。逆転する天地の中、なんとか受身を取る。すぐに次の攻撃に備えて身構える。が、ソレはあたしを攻撃した位置で止まっていた。

「……なんだ？」

不思議に思つてそこに目をやると、まだ逃げていないケイちゃん
の姿が視界の先に映った。

「のバカッ！！」

舌打ちしながら、ソレの足元を狙つて引き金を引く。
着弾。バランスを崩してソレが倒れる。

ケイちゃんは一瞬、あたしを見て、はじかれたように走り出した。

「まったく……さつさと逃げろよ。お前もそう思うだろ？」

ゆらりと立ち上がったソレに笑いかける。

ソレは、タイミングを見計らっているのか攻撃をしてくる気配は
ない。

3原則に当てはまらないロボット。人を殺すことが許されたロボ
ット。

それは一体なんと呼ぶのが正しいのだろう。
改めて思ったのは、パルシアルのほうが会話が成り立つだけまだ
ましだという、どうでもいいことだった。

あたしは、銃を握りなおす。

人間に似せられたボディに、凄まじい機動力、これで装甲がぶ厚

く出来ているということとは、まず考えられない。

残弾数がどのくらいか覚えていないが、的を一つに絞って、確実に弾を撃ち込めばきつと破壊できるはずだ。

銃を構えると同時にソレの姿がぶれた。尋常でないスピード。

死神の鎌のようなブレードが光った。咄嗟に後ろに飛んで避ける。鎌が左腕を掠める。信じられないほどの激痛が走った。飛び散る。赤。紅。朱。

歯を食いしばって、痛みを意識から排除する。

視界にソレがうつる。ソレはすぐに次の攻撃を加えようと足を一歩出し、体勢をくずす。先程の足元への攻撃が功を相したのかだろうか。ともかく、あたしにとってはその一瞬で十分だった。

一挙動でソレの動力部があるところに照準、発砲する。

5発目で装甲がはがれる。

ソレが動く時間を与えないように休むことなく引き金を引き続ける。

動力部が露になった。後一発で、破壊できる。あたしの勝ち。引き金を引く。

——カシッ。

勝ちを確信したあたしをあざ笑うように撃鉄が空の弾倉を叩く音が空間に響いた。

「マジかよ……」

弾切れ。最悪のタイミングだ。

ブレードが迫ってくる。ソレを蹴り飛ばした反動で横に転がる。微かに腹部を掠めるブレード。血が宙を舞う。その痛みを感じる

まもなく、ソレの蹴りが的確にブレードを掠めた腹部へ飛んでくる。

再度回転する世界。

事務室のガラスを突き破って、あたしは吹き飛ばされる。

今度は、受身を取る暇もなかった。したたかに背中を打ちつける。一瞬、呼吸が止まった。

全身が狂ったように酸素を求めているのに肺が痛くて息ができない。左腕の傷口からもドクドクと血が流れているのか生温い。

起き上がろうとすると涙が出そうなほどの痛みが全身に走った。動くのは右腕だけ。武器はもう何一つない。

あたしはここで死ぬのか？

ぼんやりと思う。

「なんかウーノってさ、死ぬために壊し屋やってるみたいところあるでしょ」

ケイちゃんの声が遠く聞こえた。

死ぬため？

あたしが、死ぬために壊し屋をやっていたのなら、今の状況は願ったり叶ったりだろう。

でも、違う。そんなんじゃない。あたしが壊し屋になったのは死にたいからじゃない。

じゃあ、なんのために？

「分かりませんか？」

パルシアルの声。

分からない。いや——分かっている。

カツンという音が聞こえた。床を踏む死神の足音。

あたしはゆっくり瞳を開ける。痛みでいつの間にか瞼を閉じていたらしい。ぼんやりとした視界が広がる。

少し離れた場所にソレは立っていた。

——あたしは、死にたいなんて言える立場じゃない

既に射程距離内だというのに、ソレはさらに近づいてくる。

——みつともないくらい無駄に生きて、苦しんでのた打ち回って、ゴミみたいに朽ちるのが一番似合ってる

あたしのすぐ近くまで来てソレは止まった。

——だってそうじゃなか。まったく関係ないたくさんの命を奪って、知らなかったからとはいえ、大切な人までその手にかけたんだから、それくらい苦しんでもまだ足りないだろっ！

ソレの顔にはじめて笑みが浮かぶ。作り物めいた笑顔。

ああ、これはロボットだな。

あたしはぼんやりした頭で思った。

ソレが、ゆっくりブレードを振りかざす。不意に妹のことが脳裏をよぎった。

この期に及んで自分に都合のいい思い出に浸るほど、あたしは恥知らずではないし、妹に許しを乞えるほどまともな人生を選んでこなかった。

だから、これは在り来たりでくだらない感傷だろう。

無理矢理、妹のことを頭から追い出す。そうするとあたしの脳裏は空っぽになった。

これでいいんだろう。屑みたいなあたしはがらんどうのまま死ぬのが一番いい。

覚悟を決めてソレを見上げる。

ソレは無表情でブレードを振り下ろした。瞬間、パンと火薬がはぜる聞き慣れた音がした。

ソレがあたしに向かって崩れ落ちてくる。あたしは思わず右腕を動かして、ソレの下敷きになるのを防いでいた。

「あれれー？ まだ動けるじゃないですか」

あたしが右手で押さえていたソレを、ヒョイツと取り除くと、そいつは暢気な声で言った。

「……あんだ、なんでここに？」

「あんだじゃなくて」

「……パルシアル」

この期に及んで、バカみたいなことにこだわるパルシアルに苦笑する。

「そう。やっぱりフルネームでよばれると嬉しいですねえ」

パルシアルは満足そうに頷き、ソレをまるでゴミを扱うように手で掴むと放り投げた。

「……で、なんでここにいの？」

「実は、ずっと秘密にしてたんですけど…… AIが脱走した後から、私は彼女を殺すために独自に搜索をしてたんです。そうしたら、たまたまウーノさんもAIを搜索してたので、これ幸いと思ってウーノさんの傍に」

「……じゃあ、なんで家出て行っただよ？」

「それは……ウーノさんが1人になりたそうだったので、私なりに気を遣ってみたんですけど…… なにか問題でもありましたか？」

「気を遣うって柄かよ」

「私は、ピースな愛のポジティブですからね。はい、起きあがれますか？」

パルシアルは意味の分からない言葉を言いながら、あたしに手を差し出す。

あたしは腹部を押さえながらパルシアルの手を握る。

立ち上がると血が足りないせいかくらくらした。体もズキズキと痛む。

「歩けますか？」

「……いや、無理っぽい」

「じゃあ、おんぶしてあげます」

パルシアルはいきなり屈みこんだ。そのままの体勢で「どうぞ」とあたしを振り返る。

「はあっ！？ いいよ、いらない。やっぱり歩く、歩ける」

「遠慮はなしですよ」

馬鹿だ、こいつは。まったく警戒のない背中に毒づく。

あたしが壊し屋で自分は違法廃棄ロボットだと言う立場を忘れて
いるんだろうか。

今、この瞬間、あたしに壊されても文句は言えないのに。って
いうか、こいつだって元々はあたしを殺す気だったんだから、今が絶
好の機会なんだけどな。

——ホントに馬鹿なヤツだ。

「早くしてくださいよ」

パルシアルの声にあたしは一つ嘆息して、その背中に体を預けた。
パルシアルはあたしに振動を伝えないように気をつけているのか、
ゆっくりと歩き出す。

歩きながら「救急車が来るまであと10分程ですよ」とパルシア
ルが口にした。別にどうでもいい。

外は薄暗くなっていた。凍えた灰色の雲が、街をすっぽりと包み
込み、いまにも雨が降りだしそうだった。

まだ救急車は来ておらず、パルシアルはあたしをおぶったまま「
退屈ですね」と空を見上げた。

あたしはゆつくり口を開く。

「――誕生日だったんだ」

「はい？」

「妹が死んだ日はあたしの誕生日だったんだよ」

パルシアルはあたしを気にするようにチラリと首を回したが、すぐにそれを戻した。あたしは気にせずに話を続ける。

「妹は彼氏の家に行くって言って出かけて、それでそのまま帰ってこなかった。でも、ホントはあたしの誕生日プレゼントを買ったために、センチュリービルに行ってたらしくてさ」

氷の粒が紛れ込んでいるような冷たい風が頬を撫でる。泣きたくはならなかった。

「その日のあたしは、自分のしてきたことで馬鹿みたいに頭一杯だったから……いつも暗くなる前には帰ってくるあの子が帰ってこなくても、そう気にしてなかったんだ。それより、いつ事件のことが流れるかってずっとTVに釘付けでさ。速報で事件のことが報道されて、ガッツポーズなんかしちゃって。乾杯しようと思って冷蔵庫開けたら、その中に手作りのバースデー・ケーキが入ってたんだ。その時になって、あたしははじめてその日が自分の誕生日だってことに気づいたんだ」

気づいた時には、もうあたしの誕生日を祝ってくれる人間はいなくなってたけど。

「ホントどうしようもないバカだよな」

情けない笑いが喉の奥から漏れる。

今まで誰にも言わなかったこと。かといって、忘れることもできなかった。忘れられるはずがなかった。

この世界でたった一人の大切な人を殺しておいて、それを忘れてのうのうと生きるなんて、できるはずがなかった。

だから、せめて苦しもうと思った。苦しんで苦しんでその果てに地獄に堕ちればいいのだと。

それはあまりにも自己本位な考えだけれども――

あたしが話し終わるのを待っていたかのように、冷たいモノが頬に当たった。雨が降り始めたようだ。

曇った天を仰いで雨粒を顔で受け止める。

この雨がなにもかもを流してくれるなどとは思わない。ただ、なんとなくそうしたかった。

「ウーノさん」

不意にパルシアルがあたしを呼んだ。

「……ん？」

「これからは、私のことパルって呼んでもいいですよ」

「ズルはなしじゃなかったの？」

「特別です」

パルシアル、いや、パルが微かに笑う。

その振動が傷口に響いて痛かったけれど、不思議と気にならなかった。遠くでサイレンの音が聞こえていた。

いつもは穏やかな私の工房では、先程から熱い口論が繰り広げられている。それも私の目の前で。

口論はマスターである金髪の少女が、人形ドールの体感機能のレベルを下げて欲しい、と私に注文したことに起因している。

それはかなり珍しい注文だった。逆の注文なら多数あったけれど。

人形ドールはそのことを全く聞かされていなかったらしく、血相を変えて抗議をはじめた。

それから10分。何度も同じやり取りが繰り返されている。

「絶対に、嫌ですからね！ 私のお買い物よりも無駄なお金の使い方ですよ、それは」

「ガタガタ言わないでしてもらって。ただでさえ、お前は普通と違うんだから」

「そりゃあ、私はそこらのおバカな人形ドールたちと違って完璧ですけど……ともかく今のままでいいです。お布団は、ふつかふかなのが当たり前なんです！」

「あ、おい！！ ちょっと待ってって！！」

主の制止の声も聞かずに少女人形ドールは店を出て行った。

命令に忠実なのが売りの人形ドールにしては、およそしくない行動。私の良く知る彼女の姿に重なる。

彼女以外にもあんな人形ドールが存在していたのかと、私はなぜか少しホッとしていた。

「……まったく、逃げ足だけは速いんだから」

ドアの上で揺れている鈴を睨みながら、少女が苛立たしげに床を蹴る。その拍子に肩に掛けていたライフルがズルリと落っこちた。少女が慌ててそれを引き上げる。

流れるようなコミカルな動きに、笑っていいものかどうか逡巡している、少女が「すみませんねえ、あいつ、我俣で」と、私の方を振り返って申し訳なさそうに頭を下げた。そこでまたライフルがずり落ちる。わざとしていえるのかと思わせるほどのタイミングだ。吹き出しそうになるのをこらえながら私は「いえ、大丈夫ですよ。マスター^{マスター}人形が喧嘩できるなんていい関係じゃないですか」と言った。本心だった。

私の言葉に少女は「いい関係ねえ……」と呟き苦笑を浮かべる。

「まあ、いいや。今度は、あいつをちゃんと説得してから来ることにするよ」

「お待ちしています」

私が頭を下げると少女も軽く会釈をし、そのまま小走りで工房からでていった。なんのканの口では言っても先に飛び出していた人形^{人形}のことを気にしているらしい。やはりいい関係だと思う。

2人が出て行ったドアを一時見つめる。それから、たまっている仕事にとりかかることにした。

私の仕事は、擬似恋愛用のために創られた人形^{人形}のカスタマイズをすることだ。

元々、人形^{人形}にはそれ相応の基礎プログラムが備え付けられている。だけど、より自分の嗜好に合った人形^{人形}を求める利用者は多い。

当然といえば当然のことだ。彼らは自分の思い通りになる人形が欲しいのだから。

ただのロボットのメンテナンスと違って、人形ドールのカスタマイズを生業とするカスタマーは——主に人形ドールの性的な部分を弄る為、より高度の技術が必要とされ——まだまだ需要のそれには追いついていない状況だ。おかげさまで私の商売はけっこう繁盛している。

人形ドールの普及に伴ってできた職業の中で、カスタマーは壊し屋について高給取りといえるだろう。

別にそのことに誇りを持っているわけじゃないけど——むしろ、逆だ——暮らしが楽なのは結構なことだと思う。

独立してから衣・食・住に困ったことはないし、自分の趣味に取れる時間も僅かながある。私は今の生活にかなり満足している。

今の生活、彼女との二人暮らしに——

「マーサ、そろそろ起きなよ」

朝、私のベッドを占領している彼女にそう声をかける。

「ん…… かおりさんも一緒に寝ましょう」

彼女は寝ぼけ眼のままバカなことを言って、少しだけ横にずれた。そうすると、彼女の隣に1人分のスペースが空く。

「ほら」

パンパンと空いたところを手で叩きながら、子供のような瞳で私を見つめてくる。

仕方なく、私は彼女の隣に身を滑り込ませた。

「かおりさん、体冷たい」

彼女は私の背中に腕を回し「仕事しすぎ」と咎めるように言った。

「仕事じゃないよ」

「……じゃあ、なに？」

「マーサに友達作ってあげてたの」

言っと、彼女は不満そうに眉間に皺を寄せて、私から体を離れた。喜んでくれると思っていただけに少し意外だ。

私がその態度に戸惑っていると「どういうこと？」と彼女が問う

てきた。

「私が仕事でいない時、暇だ暇だって言ってたでしょう？ だから、仕事で余ったパーツかき集めて、一から人形ドールをつくって見たのよ」
「……ふーん」

彼女は気のない返事をする、ベッドから体を起こし、そのまま部屋を出て行ってしまった。

その後姿を見送って、私は落胆の溜息をついた。

一体、なにが気に喰わなかったのだろうか？　いつまでたっても気まぐれな彼女の行動は私には理解できない。

ふと先日マスターの主と人形の喧嘩のことを思い出す。

マーサも言いたいことがあるのなら、あの人形ドールのように遠慮なく言ってくればいいのに。それとも、どれだけ長く一緒に暮らしても、元々の主マスターじゃない私が相手では無理なのだろうか——考えて、私はベッドに体を横たえたまま疲れた双眸を閉じた。

マーサは、私が仕事と関係なく接した初めての人形ドールだ。

その頃、カスタマーとしてまだまだ駆け出しだった私の一日は、カスタマイズに必要なパーツをスクラップ置き場から拾ってくることから始まっていた。

丁度、人形ドールが大流行した時期で、それと同時にスクラップ置き場には人形の残骸が捨てられるようになっていたからだ。

その日も、そうだった。

いつものようにスクラップ置き場にいった——そして、私は彼女を見つけた。

元々の主の趣味なのか、少し下品に感じられる金色の髪に大きな二重の瞳がとても印象的だった。

スクラップ置き場には、彼女のように壊れてもいないのに捨てられる人形はたくさんいた。

それなのに——どうしてだか分からない。彼女と目があつた瞬間に家へ連れて帰られなければいけないような気がした。

今、思えばそれは一目惚れだったのかもしれない。

なぜなら、その時の私は彼女が男性型として、つくられた人形だと勘違いしていたのだから。

もちろん、家に連れ帰って体のメンテナンスを始めた時に、その人形が彼ではなく彼女であることが分かったのだけれど。

メンテナンスを終えると、ぐったりしていた彼女はすぐに元気になった。

ただ結構な人見知りなのか、なかなか私に打ち解けようとはしてくれなかった。

それは人形の性質としてどうなのかな、とも思ったが、私は私で人見知りする性質なので上手く彼女と接することが出来ず、暫くの間、私たちはぎくしゃくしたまま日々を過ごすことになった。

そんなある日のことだ。

「か、かおりさん」

彼女が不意に私の名前を呼んだ。

私は驚いて返事も返せず、彼女をただバカみたいに見つめてしまった。

たかだかそれくらいのこと、と思われるかもしれないけれど——その時まで彼女は私のことを一応、主と呼んでいたのだ。

ただ私は、彼女の本来の主では^{マスター}ないから、彼女からそう呼ばれることに少し抵抗があつた。

そのことを彼女にも何度が伝えたことがある。それでも彼女は、頑ななまでに私のことを主と呼ぶのをやめなかつた。

だというのに、その日、急に――

あまりの驚きに固まっていると「な、名前違いましたっけ？」と、彼女は不安そうな声でいった。私は慌てて首を振つた。

「よかった。記憶領域が壊れてるのかと思いました」

彼女はそういつてホツとしたように笑つた。

それが随分と彼女の印象を変える笑顔で、私はまたバカみたいに口を開けなければならなかつた。

結局、なにがきつかけで、彼女が私のことを主と呼ばなくなつたのかは、今だに分からない。

単純に私が主^{マスター}に値しなかつただけなのかもしれないけれど――あの頃から彼女は気まぐれなのだ。

私は深く嘆息し重い体を起こす。寝不足のせいで少しだけクラクラした。だけど、そうもいつてられない。機嫌を損ねた彼女がそろそろ物にやつあたりしはじめてもいい頃だ。

ボサボサになつた髪を撫でつけて、私は隣の部屋に向かつた。

私が部屋に入ると、彼女は白いソファの上にあぐらをかいて座っていた。

なんの感情も見せない無表情。端整な顔立ちのせいで、そうするとひどく冷たい印象を与える。

「マーサ？」

呼びかけると、彼女はふいつとわざとらしく私がいる方とは反対側に顔を向けた。まるで子供だ。

さて、どうやって不機嫌な彼女をなだめようか？

気づかれないように息をつき彼女の隣に座る。と、彼女は体ごと私に背を向けた。

「ねえ、なにをそんなに怒ってるの？」

理由が分からなければどうしようもない。私は仕方なくそう切り出した。

「分かんないんですか？」

言外にそれくらい分かって当たり前だという響きが含まれている。だけど、分からないものは分からない。

「……ゴメン、分かんない」

私が言うと、彼女はようやくこちらに向き直った。先程と違ってどこか悲しげな眼差し。

「かおりさん、新しい人形ドールつくったんでしょ？」
「うん。初めてにしては上出来っていうか会心の作なんだよ、これが」

重たい空気に耐えかねて冗談めかしてそう言つと、彼女はますますその瞳を曇らせた。

「かおりさんは、あたしのこと嫌になった？」

「え？」

「だって……その新しい子にあたしの代わりさせるんでしょ？」

言われて、はっとした。彼女は一度捨てられている。そのことを思い出した。

ロボット機械だつて捨てられれば傷つく。傷つかないわけがないじゃないか。特に人形ドールのように人間に似せてつくられているのなら、なおさら。

マスター主に捨てられるということが、彼女たちにとってどれほど深い傷になるのか、私には想像もつかないけれど。

人間が新しい人形ドールを家に連れてくるといふこと＝自分が捨てられるということ。彼女がそう考えてもおかしくはないのに——私はあまりにも軽率すぎた。

「う、ごめんなさい、マーサ。そういうつもりじゃないのよ」

私は優しく彼女の両頬を手で挟みこむ。

彼女は泣くのをこらえるかのように口をきゅっと一文字に結んでいた。

「ホントにマーサに友達をつくつてあげただけで……ゴメン

ね、不安にさせて。ゴメン」

「……ホントに？」

「うん」

「絶対？」

「うん」

頷くと、彼女はホツとしたように口元を綻ばせ私に抱きついてきた。

「マ、マーサ？」

「ねえ」

「な、なに？」

「かおりさんの一番はあたしですか？」

耳元で囁かれる。彼女の問いに私は顔が赤くなるのを感じた。

子供っぽくてホントは小心者のくせにこんなとこだけ気障に決めてくれる。一体、どんなプログラミングをしたらこんな人形^{ドール}ができるんだか。

私は、半ば呆れながら——しかし、彼女がこういうことを口にできるような関係も、傍から見たらいい関係になるのかなと思った。

あの時の少女の苦笑の意味がなんとなく分かったような気がする。

あの2人が主^{マスター}と人形^{ドール}という、ただ一方通行の主従関係ではないように、私たちもそうなのだろう。

だから、きつとマーサは私のことをもう二度と主^{マスター}とは呼ばないはずだ。

なぜなら、私たちの関係は——

「ねえ、かおりさん、答えは？」

催促の声に、私は確かな意志を持って頷いた。

その人形は特別製ということもあって、人形屋ドルショップで売られているとことなく顔つきが似通った人形達ドルとはまるつきり違って見えた。

「あと数分もしたら目を覚ますと思うんだけど」

この人形ドルの製作者であり、ドルカスタマーであり、あたしの遠い親戚でもあるかおりさんは、そう言う時間を確認するように腕時計に視線を落とす。

そして、申し訳なさそうな顔になった。

「ごめんね、今日はちょっと時間がなくて、起動まで見てあげられないんだ」

「ううん、無理言って来てもらったの、あたしの方だし」

かおりさんは、この間、腕利きのカスタマーとしてなにかの雑誌に載ってから、ドルカスタムの予約が、じゃんじゃんきて、てんやわんやしているらしい。

そんな状況なのに、あたしのことを優先して来てくれたのだ。感謝こそすれ、謝ってもらうようなことじゃない。

「ほら、かおりさんはもう行つて。あたしは本当に大丈夫。これでも一応、小さい頃からかおりさんが仕事してるところずっと見てきたんだから」

まだ申し訳なさそうな顔してるかおりさんにそう言うと、彼女は少し思案してから「もし、なにか不具合があつたらすぐに私のところに連絡して」と、連絡先の書いた番号をベッドの脇の机に置いた。

「それじゃ、元気でね」

「うん、かおりさんも。あんまり根づめて仕事しないようにね」

あたしの言葉に、かおりさんは微笑を浮かべると、あたしを強く抱きしめて、部屋を出て行った。

おざなりにかおりさんを見送ると、あたしはまだ眠っている人形^{ドール}を見つめる。

もともと、この人形^{ドール}は、かおりさんと一緒に暮らしている人形^{ドール}が、かおりさんが仕事をしている間、寂しくないようにと、友達用プログラムを組んで制作したものらしい。

だけど、結局、理由あって、人形^{ドール}は当初の目的で使われることなく、かおりさんの家の倉庫に眠ることになったという。

その時のあたしは、まさに悲劇の主人公になったばかりで、病院の一室に閉じ込められていた。

入院している間、あたしはいろいろな人形^{ドール}を見た。

それらは全て、もう手の施しようがない死を待っただけの患者に与えられる看取り用の人形^{ドール}だった。

病院側はその看取り用^{ドール}人形をつけて、あたしの精神の安定をはかろうとしたようだけれど、それらはあたしの性分にはまったく合わなかった。

プログラム通りの甲斐甲斐しさ。優しい言葉。

そんなの反吐が出る。そんなものに看取られるくらいなら、一人で死んだほうがマシだった。

病院から、あたしのそんな話を聞きつけたかおりさんは、お見舞いがてらに彼女を連れてきてくれた。「この子は一味違うよ」と言っ

彼女は目がちょっと離れていて、彫像のようなやけに存在感ある鼻をしてて、パーツパーツだけとってみるとひどくアンバランスなのに、全てのパーツが合わさるとなぜだかとてもキレイだった。

あたしを看取るのはこの人形だ、ピンと来た。

そこでおりにさんに無理を言っつて、彼女のプログラムを組み変えてもらうように頼んでみたのだ。

かおりさんは、最初、あたしの申し出に戸惑っていたけれど、さすがに死期の近い人間の頼みを断れなかったのだらう。意外にあっさりと了承してくれた。

かおりさんが、彼女のプログラムを調整している間に、あたしの病気は「やつぱり最期はお家で暮らしたいですよね？」レベルまで進行していた。

キューーンと機械の駆動音が聞こえた。ようやく彼女のお目覚めだ。

あたしは彼女を覗き込む。睫が少し震えて、ゆっくりとその瞳が開いた。灰色に近い黒。

パチパチと目を慣らすように2、3回瞬きを繰り返したあと、彼女はあたしを見た。

ドキドキしながら彼女の言葉を待つ。こんな気持ちは久しぶりだ。彼女の唇が微かに動く。よく聞こえない。あたしは、その口元に耳を寄せた。

「……………むあ」

「へ？」

意味不明。

顔を離して彼女を窺い見ると、彼女はにっこりと笑った。つられて笑ってみると、彼女は「あはっ」とさらに相好を崩して、

あたしに飛びついてきた。

「うわっ!」

「びっくりした?」

「う、うん」

こんなに子供っぽいなんて思ってなかった。

「名前どうする?」

「名前って?」

「ユウナはユウナでしょ。あたしは?」

彼女はあたしを指差し、それから自分を指差した。

あたしの名前は、もう彼女の記憶領域の中に入っているらしい。

「えっと……」

名前のことなんてちつとも考えていなかった。

「は〜や〜く〜」と彼女がじたばた暴れる。まるで地団駄を踏む子供だ。大人っぽい外見とは大違い。

あたしは、ほんのちよつとだけ、この人形ドールを看取り用を選んでよかったのかな、と後悔の念を抱いた。

やがて、彼女は暴れすぎてバランスを崩し、あたしが手を伸ばすよりも先に、後ろに倒れてごつんと頭を打った。

「むう」

顔を顰めて唸る彼女を見て、ふっと名前を思いつく。

「ムーッ!」

「むあ？」

「ムー、今日からあなたのことはムーって呼ぶ！！」

「ムー？」

「そう、ムー！！」

「むあっ！！」

名前が気に入ったのかなんなのか、やっぱり彼女は意味の分からない言葉を発して、あたしに抱きついた。

あたしは、今日からムーと暮らす。

最期の日がくるその時まで。

「誰、これ？」

突然、お見舞いに来てくれた同じ施設育ちの彼女はムーを見るなり、慄然とした表情になってそう言った。

彼女は人形ドールの存在をあまり快く思っていない。昔、人形ドールいろいろあったのだと聞いたことがあった。詳しくは教えてくれなかったし、聞いてもないけど。

それを知っているから、あたしはムーが人形ドールであるということを彼女には隠そうと思っていた。

それなのに――

「ユウナを看取る会、会長のムーだよ」

「……つまり、看取り用のドールってこと？」

「正解っ――！」

あっさりばれた。

「ユウナ……」

彼女は複雑な表情であたしの名を呼んだ。

「人形ドールなんかに頼るのは……むぐっ」

言いかけた言葉は急に口元に伸びてきたムーの手によって止められた。

「……っにすんのよ!!」

彼女が乱暴にその手を払いムーを睨みつける。ムーは無表情のまま。

一触即発、竜虎相まみえる、ええつと桃栗三年柿八年、これは関係ない——ともかくとってもヤバい雰囲気だ。

二人ともきつとあたしが超がつくほどの重病人だっことを忘れてる。

「あなたが人形嫌いなのは分かったけど」

険悪な空気をどうにかしようとしてあたしが必死に頭をひねっていると、ムーが不意に口を開いた。

「ユウナにひどいことを言う権利はないと思うんだ」

「はあ!? 私がいつそんなこと言った？」

「今、言おうとしたじゃん」

ムーは無表情のまま。こんな顔は見たことがない。

あたしの知ってるムーは、いつも馬鹿みたいに笑ってたから。なにを言ってもなにをしても、むあむあ言ってへらへらへらへらでも、今はそうじゃない。もしかしたら、怒っているのかもしれない。

ムーは人形^{ドール}だけど、かおりさん特製の人形^{ドール}だから、そんなこともあるのかもしれない。

あたしが横目でムーを盗み見てみると、それに気づいたのかふつとムーの顔が和らいだ。

そして、ムーは急に彼女の方に歩み寄り「というわけで、今度か

ら来るときは連絡してから来てよ」と、彼女の肩をポンと叩いた。

「へ？」

突然、態度を翻された彼女は当たり前だけど戸惑っているみたいだ。無論、あたしも戸惑っている。

「あなたが来る日は、あたしはちよっくら山へ芝刈りとか、川に洗濯にでも行ってるからさ。それでいいでしょ？」

冗談とも本気ともつかないような口調でムーは言う。

「そんなわけだから、あたしは出かけてきますかねえ」

「……今日はもういいよ」

「むあ？」

「もう帰るから」

玄関に向かおうとしたムーを手で制して、彼女が呟く。

ムーは肩を竦めて私を見た。その間にも、彼女はさっさと玄関の方へ向かってしまう。

「……ユウナ」

ドアの前で彼女はピタリと足を止めた。

「え、なに？」

「……後悔しない？」

彼女があたしを振り返る。

後悔？

どういう意味なのか分からず答えあぐねていると、ムーの腕があたしの肩を包んだ。

それを見て彼女は今日はじめて笑顔を見せ——それは少し複雑そうな笑顔だったけど「ならいいや」と手を振って、あたしの家を出ていった。

朝、目が覚めると、炊き立てのご飯とお味噌汁の匂い。ムーはとても料理が上手だ。

朝食の準備ができると彼女は部屋に飛び込んできて、あたしを優しく起こしてくれる。

「ユウナ、今日の調子はどう？」

「いいよ」

「むあ！　じゃあ、いただきます、できるね」
「うん」

毎朝、恒例のやり取り。調子がよくない日は、本当に残念だけど食欲がまったくなくて、彼女が、折角、作ってくれた料理が食べられなかったりする。最近は、そんな日が多くて憂鬱だ。

でも——今日は本当に気分がいい。

「いったただっきまーす！！」

ご飯を食べるあたしを見て、嬉しそうにムーが笑ってて。だから、こんな日はとても大切だと思える。

朝食が終わるとすることはいろいろ。

一緒にゲームしたり、一緒にお買い物したり、一緒にお掃除したり、一緒に夜ご飯作ったり——大事に大事に壊れ物を扱うかのようにあたしに接してくる病院とは違って、ムーはあたしの調子をきちんと考えながらも、無理をしなくてすむ範囲でいろいろなことを一緒にしてくれる。あたしは、それがとても嬉しかった。

「皿洗い！ 皿洗い！！」

スポンジに洗剤をたっぷり垂らして、ぎゅっぎゅっと握ると泡がほわほわ出てくる。

ムーはその泡を見るのが好きで、食事の後片付けになると、いつもこんな風を楽しそうにはしゃぐ。

「好きだね、ムー」

ムーの洗ったお皿を、あたしは隣で受け取って拭く。

あたしの言葉にムーは「泡楽しいじゃん、ふわふわ」と、指についた泡をあたしに向けて、ふうっと飛ばしてきた。

泡は、あたしに当たってパチンとはじける。まるであたしの命みたいに儚い。

もう諦めているけれど、こんな風に呆気なくはじけちゃうのは少し怖いな、ふとそんな感傷に襲われる。

「ユウナ」

不意にムーが妙に真面目な顔になってあたしを呼んだ。

「なに？」

返事と同時に、ムーはあたしに向けて、また泡をふうっと飛ばしてきた。

さっきより多目の泡は、やはりあたしに当たるとはじける。

「キレイだよねえ」

「え？」

「なんにでも終わりがあからキレイに輝くんだよ」

ポカンとムーを見てみると、彼女は優しい笑顔であたしをぎゅつと抱きしめた。

「あたし、ユウナの輝きを最期までちゃんで見守ってあげるからね」

「ムー……」

——後悔しない？

今、誰かにそう問われたら、あたしはすぐに頷くだろう。

もし、明日、死んでしまっても、あたしはムーとの暮らしを後悔しない。

あたしより背の高いムーの胸の中から見上げる。

「いいこと言っと思ったでしょ？」

ムーが子供っぽく、むあっと口を開けた。

その視線は、まっすぐにあたしを見つめていて。

例え、それが巧みなプログラムだったとしても、なんだか照れくさくて嬉しくて

「ぜんっぜん」

「むあ？」

あたしは、その気持ちを誤魔化すために彼女から離れた。

「ほら、ムーが濡れた手で触るから、あたしの服まで濡れちゃったじゃん」

「おおっ！ ホントだ」

ムーは、こいつあ大変だとばかりに大げさに両手を挙げた。

その弾みでムーの手に残っていた泡がまた宙に飛んだ。それはキラキラしていて確かに綺麗だった。

あたしは、これからもこうして彼女と一緒に暮らす。暮らしていく。

後悔しない最期の日を迎えるために――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6813x/>

carvaly

2011年11月8日20時12分発行